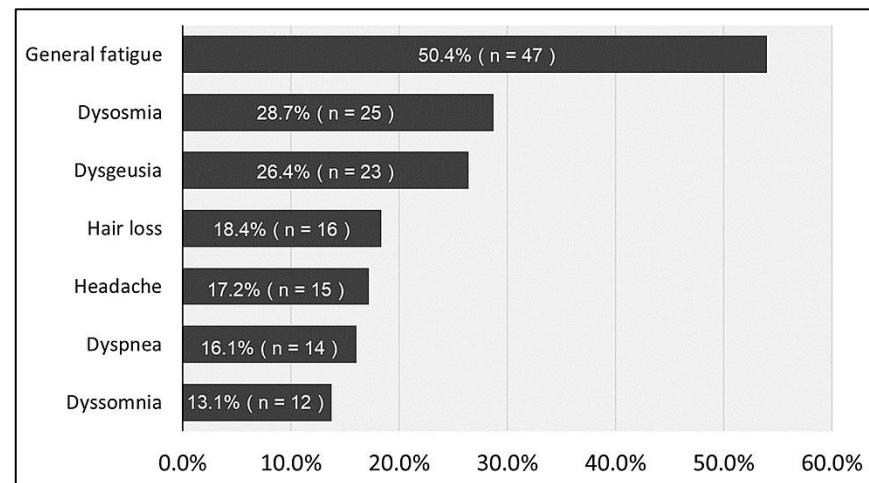


コロナ・アフターケア外来を受診した日本人患者さんの臨床的特徴

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）罹患後の多くの患者さんがLong-COVIDないしPASCと医学的に定義される後遺症状を呈することが明らかとなってきましたが、その長期的な臨床経過や予後、最適なマネジメント方法はまだ明らかになっておりません。一方、そうした患者さんの受け皿になるべく、我々は2021年2月に「コロナ・アフターケア（CAC）外来」を設置し、県内外の医療機関からCOVID-19罹患後の各種症状に悩む患者さんの受入れを行ってきました。

本研究では9月までの半年間にCAC外来を受診された合計87名について、その受診に至るまでの症状経過や主訴、患者背景、紹介元などについて検討しました。①急性期には入院加療を要さなかったような軽症患者さんが多く含まれ、②病院よりも診療所からの紹介が多く、③特に倦怠感が半数以上の患者さんにおいて問題になることなどが明らかとなりました。CAC外来のような、地域医療機関の受け皿として各専門診療科と連携した全人的・総合的アプローチが可能な診療体制の必要性は高いと思われました。



図：CAC外来の主訴の内訳（複数選択可）
→50%の患者さんが倦怠感を主訴とする